

大洲市立博物館報

第23号
 〒795-0054
 愛媛県大洲市中村618-1
 大洲市立博物館
 TEL&FAX (0893)24-4107

大洲藩初代藩主加藤貞泰没後四百年

館長 兵頭隆治

大洲藩初代藩主である加藤貞泰は、天正八年（一五八〇）、光泰の嫡男として近江国磯野村に生まれました。文禄二年（一五九三）、父光泰が朝鮮の役で死去したことから、翌年十五歳で家督を相続しますが、その後美濃国黒野四万石に転封を命じられます。慶長十五年（一六一〇）には、二万石を加増されて伯耆国米子を与えられ、元和三年（一六一七）には、大阪の陣の功により、伊予国大洲六万石が与えられます。



初代藩主：加藤貞泰

た。貞泰の人物像については、人愛深く、節義を重んじ、武術に達し、とりわけ八条流馬術に秀で、休みの日には、詩を作り、歌を詠じ、連歌を好むなど、風流人であったと伝えられています。貞泰は、元和九年（一六二三）、江戸において享年四十四で死去し、その後は泰興が家督を相続することになります。今年、貞泰没後四百年の年になります。そこで当館では、当館が所蔵する資料の中から、初代藩主貞泰と二代藩主泰興に関する資料を展示し、大洲藩加藤家草創期の歴史を振り返る特設展を十一月一日から開催しますので、ご期待ください。

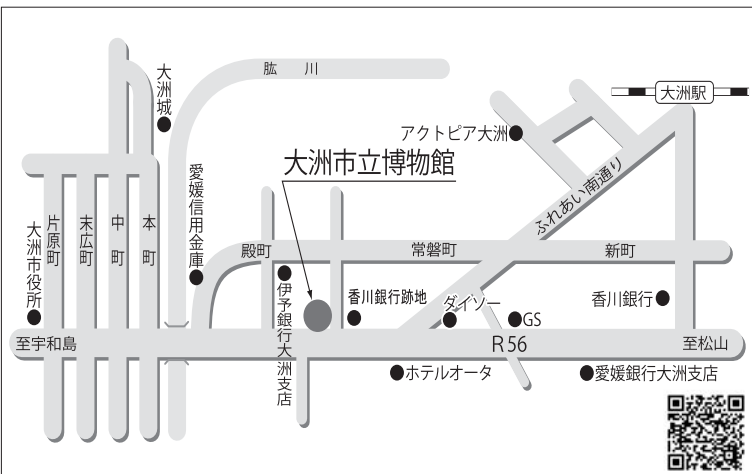
また当館では、四月末から七月中旬までの間、五代目肱川橋が開通したことを記念して、大洲十二景図屏風、大正から昭和初期に発行された観光絵葉書の画像などを用いて、肱川橋や大洲の町の光景を紹介する特設展を開催しました。さらに、八月初旬から十月中旬まで



加藤貞泰・泰興の時代を振り返る特設展が終了した後は、江戸期に発展した和本文化の世界を、大洲ゆかりの諸本を中心に展示しながら、江戸文化の一端と大洲藩における出版事業の一部を紹介する特設展を一月末から開催します。貞泰没後四百年を記念した特設展と併せてご観覧ください。なお当館では、本年度から当館独自のホームページで、展示案内や博物館情報等を発信していきますので、ご利用ください。



二代藩主：加藤泰興



開館時間 午前9時～午後5時
 休館日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌平日）
 12月29日～1月3日
 入館料 無料



各種展示

■4階展示室

【常設展】

大洲の歴史と文化

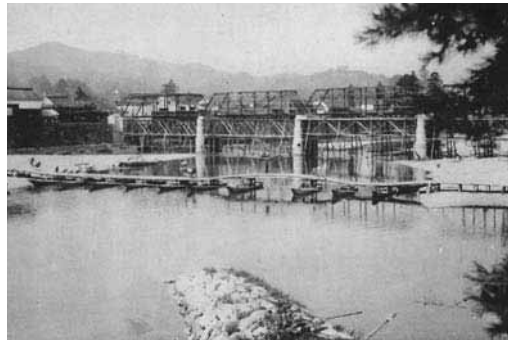
「中江藤樹」

「シーボルトと三瀬諸淵・高子」

【特設展】

大洲ひじかわ川景色

R4 4月29日(金) ～ 7月18日(月)



【肱川舟橋と初代肱川橋工事の様子】

・ 絵図から見る大洲城

R4 8月2日(火) ～ 10月16日(日)

・ 加藤貞泰・泰興の時代

R4 11月1日(火) ～ 1月22日(日)

・ 近世の和本文化

R5 1月31日(火) ～ 4月16日(日)

■5階展示室

【常設展】

大洲地方の自然と暮らし

化石・鉱物・岩石・動物の剥製・植物の標本・民具資料などを展示



■5階特別展示室

・ 県展入選者(大洲市在住) 作品展並びに大洲高等学校・大洲農業高等学校・長浜高等学校有志生徒作品展

R4 2月1日(火) ～ 2月20日(日)



・ 節句の人形展

R4 3月25日(金) ～ 5月29日(日)



・ シルクロードの旅記録写真展
R4 6月14日(火) ～ 7月24日(日)



・ レンガのある風景はがきコンクール 作品展
R4 8月2日(火) ～ 10月2日(日)

・ 藤樹まつり児童生徒書画作品展
R4 10月19日(水) ～ 11月20日(日)

・ 小学校理科自由研究作品展
R4 12月14日(水) ～ 1月10日(火)

【特別展示室の利用案内】
絵画、写真、美術工芸品などの展示会場として無料で利用できます。

大洲自然科学教室

◇この教室は、子どもたちの科学する心を育てるために設けられたものです。

昭和62年5月30日に第一回目の教室が開催され、今年度末で通算二五三回を数えます。

◇指導者は、大洲市理科同好会(小中学校教員)、OB・OGの先生方です。

◇入会費は不要ですが、保険料は必要です。講座の内容により、バス代や入館料等が必要となります。

【活動内容】

・ 6月11日(土)大洲市防災センター・五郎河原

「開講式・植物観察と水生生物調査」

「肱川増水のため、水生生物調査は室内学習に変更」

7月16日(土)伊方町塩成

「植物観察としらす漁体験・チリメンモンスター探し」

コロナ感染拡大防止のため中止

8月12日(金)大洲青少年交流の家

「夏の星空と流星の観察」

9月24日(土)長浜海岸・夢永海岸

「肱川下流部の地質と地形並びに海の生き物や海浜植物の観察」

10月29日(土)天狗高原

「植物や地質の観察」

11月26日(土)雲海展望台

「秋の植物や大洲盆地の気象・地形の観察」親子活動

1月14日(土)野村・城川方面

「野鳥や地質の観察・閉講式」



大洲歴史文化教室

◇この教室は、子どもたちの郷土を愛する心を育むために設けられたものです。平成6年8月10日に第一回目の教室が開催され、今年度末で通算一七一回を数えます。

◇指導者は小学校教員を中心とした歴史に詳しい方々です。

◇入会費は不要ですが、保険料は必要です。講座の内容により、バス代や入館料等が必要となります。

【活動内容】

・6月25日(土) 大洲市内

「開講式・田口地区の歴史探訪(比地神社・見性庵・天満神社等)」

・7月23日(土) 南予方面

「梶原町・鬼北町・城川町歴史民俗資料館見学」

コロナ感染拡大防止のため中止

・8月27日(土) 平小学校

「体験活動(埴輪作り)」



・9月10日(土) 内子方面

「内子の歴史探訪(芳我邸・大森和ろうそく屋・内子座・高昌寺等)」

・10月22日(土) 大洲市内

「肱南・久米地区の歴史探訪(臥龍山荘・盤泉荘・山本尚徳邸跡・曹溪院・古学堂等)」親子活動

・11月12日(土) 宇和方面

「宇和の歴史探訪(開明学校・民具館・明石寺・県歴史文化博物館等)」閉講式

内容を変更して、7月に予定していた活動を実施

ふるさと見聞講座

◇毎年6月に会員募集を行います。年度途中からでも入会できます。気軽に参加ください。

◇バスを利用する講座の場合、参加人数が制限されます。その都度申し込んでいただきます。希望者多数の場合、申し込み先着順で参加者を決定します。

◇受講料は無料です。ただし、現地研修や創作活動は実費となります。

【活動内容】

・7月7日(木) 講話(大本敬久学芸員)

「過去の災害に学ぶ(南予地方の地震・津波・水害史)」

・8月4日(木) 講話(中矢匡先生)

「地球の上に生きる」

・9月30日(金) 現地研修

「由学館と竹田の町並み」

・10月20日(木) 講話(堀内八重先生)

「文部省唱歌のはじまり」

・12月(日時未定) 体験学習(松本三枝子先生)

「クリスマス&お正月の花飾り」

・1月(日時未定) 現地学習(吉岡宏之先生)

「バードウォッチング」

・1月19日(木) 現地研修

「中川八郎没後百年・絵画鑑賞」

大洲史談会の活動

◇大洲史談会では、年間十一回の例会を開催しています。多くの会員の方々が(現在一九四名)に支えられながら、地域の歴史や文化の継承に努めています。

・4月10日(日)

総会、記念講演(永井紀之先生)

「愛媛県におけるスペイン・インフルエンザの流行について」

・5月21日(土) 現地研修

保内方面(清水真一氏案内)

・6月11日(土) 研修旅行

大分県杵築市(宇佐く豊後高田)



7月の講話
「過去の災害に学ぶ」

・7月9日(土) 講話(高木翔太学芸員)

「四国の廃藩置県(大洲騒動と膏取り騒動)」

・9月10日(土) 講話(森永光彦氏)

「常磐井家文書より」

・10月8日(土) 講話(澄田恭一氏)

「法華寺の文化財考察」

・11月12日(土) 講話(今井要氏)

「武田斐三郎について」

・12月(日時未定) 清掃活動

「大洲城のボランティア清掃」

・1月14日(土) 講話(山田広志学芸員)

「内容未定」

・2月12日(日) 講話(五藤孝人氏)

「伊予の白山信仰(南予を中心に)」

・3月11日(土) 講話(友澤明氏)

「甲冑の修復について」



現地研修
「護国寺前にて」

【会員募集】

会費は、年間二千元です。年度末に会誌「温古」をお届けします。希望される方は、大洲市立博物館までご連絡ください。

【館蔵資料紹介】 「東海道中双六」

(当館所蔵)

双六は、サイコロを振って出た数だけマス目に置いたコマを進め、「ふり出し」から「上がり」を目指す遊びで、



かつて、子どもたちが複数人集まって行う、ボードゲームの代表的な遊びの一つでした。マス目毎に文字や絵が添えられた大きな紙を用いた双六を「絵双六」と言います。日本では室町時代に既に見られますが、浮世絵や板本などの木版印刷で大量に印刷物が作られるようになった江戸時代に流行し、

定番の遊びとなりました。そして、江戸後期には、双六もカラフルなものが数多く作られ、芸術性の高いものも登場しました。絵双六には、「廻り双六」と「飛び双六」の二種類があり、「廻り双六」は、出た数に従ってマス目を順番に進んでいくもので、「飛び双六」は、マス目ごとに書かれてある指示書きに従ってコマを進めていきます。

今回紹介する絵双六は、墨刷り一色の木版印刷によるもので、コンパクトに折りたたんで保管するようにになっています。しかし、表紙にはタイトルを書いた題せ

ながなく、盤面にも画題や制作年、制作者に関する記載がありません。盤面右隅の「江戸日本橋」をスタートに、盤面中央の「京」を目指していることから、いわゆる東海道五十三次の宿駅をたどるもので、「道中双六」もしくは「東海道中双六」と呼称される双六です。盤面を見てみると、マス目毎に、「品川」「川崎」「金川」(神奈川)などの宿駅名が書かれ、その下には、次の宿場までの距離が記されています。戸塚・小田原・沼津・江尻・金谷・浜松・赤坂・坂の下には、宿名の上に大きく「泊」の文字があります。ここにコマが止まると、一回休みという意味があります。

日本橋から京まで、約一二六里(約四九六キロ)。当時の旅は徒歩中心で、一日約十里(四〇キロ)平均とされますので、東海道の旅は十二泊程度必要な計算になります。それからすると、この道中双六では八泊分の記載しかありませんので、実際に旅するには無理がある行程と言わざるをえません。

双六は、単純に前に前にコマを進めて行くだけでは、単調になって面白くありませんので、コマによっては一回休み、二回休み、振り出しに戻るなどの指示が添えられ、この道中双六にも数カ所に指示があります。たとえば、

【箱根】
箱根へあたれば手形を忘れ江戸へ帰る。

【吉原】
吉原にあたれば大水にて一日休み
【島田】
島田にあたれば大水にて三日休み

箱根は関所があった場所で、通行の際には往来手形などの詮議がありました。それを受け、双六では「手形を忘れたので江戸へ帰る」、すなわち振り出しにもどることにされています。また、大きな河川がある場所では、大雨などにより川を渡ることができず、最寄りの宿駅で滞在して、川止めの解除を待たねばなりませんでした。そのため、この双六では、吉原や島田などで「大水」による休みという設定になっています。さらに、宿駅によっては、土地の名物の紹介も書かれています。

【小田原】
梅づけ・ういろう・かつおのたたき
【府中】
あべ川もち
【水口】
柳ごうり、きせる

名物は、食べ物に限られることなく、柳ごうり、きせる、針などの記載も見られます。この双六では、宿泊場所の数に無理が見られますが、道中双六の多くはコマ絵や名物、土地の特徴を活かした双六としての指示などにより、実際に東海道を旅した気持ちになる工夫も施されているとともに、道中案内としての役割も担っていたのです。